

NAF 日本アイアイ・ファンド報告 2024-25 年



マナサムディ山頂の植林地です（2025年2月10日）。アンジアマングラーナ監視森林の南の境となるアンジアマングラーナ村からナリンダ湾へ行く道路が手前に見えます。ここは2017年2月19日に浜口さんが光（マングラーナ）方式で植樹した場所です。毎年、草刈りを行い、隣接地域への植林を行ってきました。ここに見えている大きな木はアカシアですが、その間にマンゴー、カシューとラミーも育っています。



上左：2017年の植樹直後で苗をサッチャナヤシの葉で守っています。手前の竹の柵は道路との境ですが、今では跡形もありません。しかし、柵の補強に植えたサイザルは2025年の写真の道路沿いに姿が見えます。上右：草刈り作業員一同（保護区南西端の標識 No.10にて：2024年7月30日）この作業は村民からの提案で実施したもので、4月からの乾燥期間で枯れきった草原に火がつけられる前に草刈りを行って、植林地を守るためでした。（付録英文パンフレット：マジュンガ大学用ラミー植林作業のため）



アンジアマンギラーナ村の国道からの入り口に監視森林を示す新しい看板がコミュニン（アンジアマンギラーナ村行政区）によって2024年に設置されました（左写真）。村長さん Befoninsarason（左）はクラニさん Korany（右から二人目）といっしょに日本アイアイ・ファンドのアジャさんたちと今後とも協力を続けることになりました（2025年2月11日）。

今回アジャさんに特にお願いしたことは、赤松さんが種子を集めて2010年に発芽し、2011年にアンジアマンギラーナ川流域で植樹した540本のラミーの確認でした。



アナランベはアンジアマンギラーナ川源流域の監視森林の中央、標識 No.9 のある場所です。ここでは2022年に大きな火事があり、川の南部斜面はほとんど焼けてしまいました。しかし、ここに2011年に植えたラミーのうち6本が並んで生き残っていました（上左：2025年2月11日）。写真手前の柵とヤブとで比較するとその大きさが分かりますが、これをほぼ同じ場所の植樹2年後のラミー（上右：2013年12月）と比べるとその違いがはっきりします。あたりのヤブに埋もれていたラミーは大火事からも生き残って、大きな木になっていました。



大きくなったクラニさんの苗畑の12本のラミー林（上：2025年2月10日）。これも2010年に赤松さんが収集した種子から発芽したものです。ここでは、2023年から果実を実らせています。今回の調査では、保護区中央から村内までのアンジマンギラーナ川沿いでさらに2カ所で2010年発芽のラミー（2011年植樹）が大きくなっているのを見つけました。並んだ二本のラミー（下左）とその近くの本のラミー（下中央 2025年2月10日）。



右端写真はクラニさんの苗畑内のラミー林の中の様子です（2024年7月31日）。ここでは数百の果実を収集できます。

私たちはさらに驚きを見つけましたが、それは後で。



首都アンタナナリヴでは、チンバザザ動植物公園（PBZT）でもスアピナでも一番大きなラミー（1998年発芽）が開花結実し、それぞれ一本のメスの木に果実が実っていました（写真上左 2025年1月24日）。ロキ園長（Dr. LETSARA Rokiman 右端）とジルベール元園長（左端）はラミーの苗畑を公園内に作ることを相談しました。



スアピナのラミー（上）は開花した2本のうち1本だけが結実し、ラミーは雌雄異株（dioecious）であることが分かりました（右写真右側の木がメス：2025年1月22日）。



日本アイアイ・ファンドは2010年以來、スアピナ事務所に苗畑を作り（写真左）、今年
はチンバザザ公園と合わせて約2000個のラミーの果実を収集しました（写真右：2025年2
月1日）。このうち1500個をマジュンガへ送り、200個は首都北部近郊のアンブヒジャヌ村
（2010年発芽ラミーの植林地）に送って、そこで新たに苗畑を作ることにしました。



アンブヒジャヌ村ラミー植林地の外観（左）と木の大きさ（右）（2025年1月23日）
ラミーの幹はまっすぐで白く、緑は浅く鮮やかで、遠くから見るとことさらきれいです。



マジュンガ大学(Université de Mahajanga:UMG)へ全権派遣されたアジャさん(右から二人目)は、植物教育園(Jardin Botanique Educatif :JBE)のスタッフから大歓迎を受けました(2025年2月1日)。実は、チンバザザ公園元園長のジルベールさんの娘さんヴーラさんはマジュンガ大学学長秘書なのです(右から三人目)。もちろん、島はヴーラさんが小さい頃からよく知っています。ジルベールさんの奥さんはマジュンガ大学の植物学の教授だったのですが、残念なことに一昨年亡くなりました。

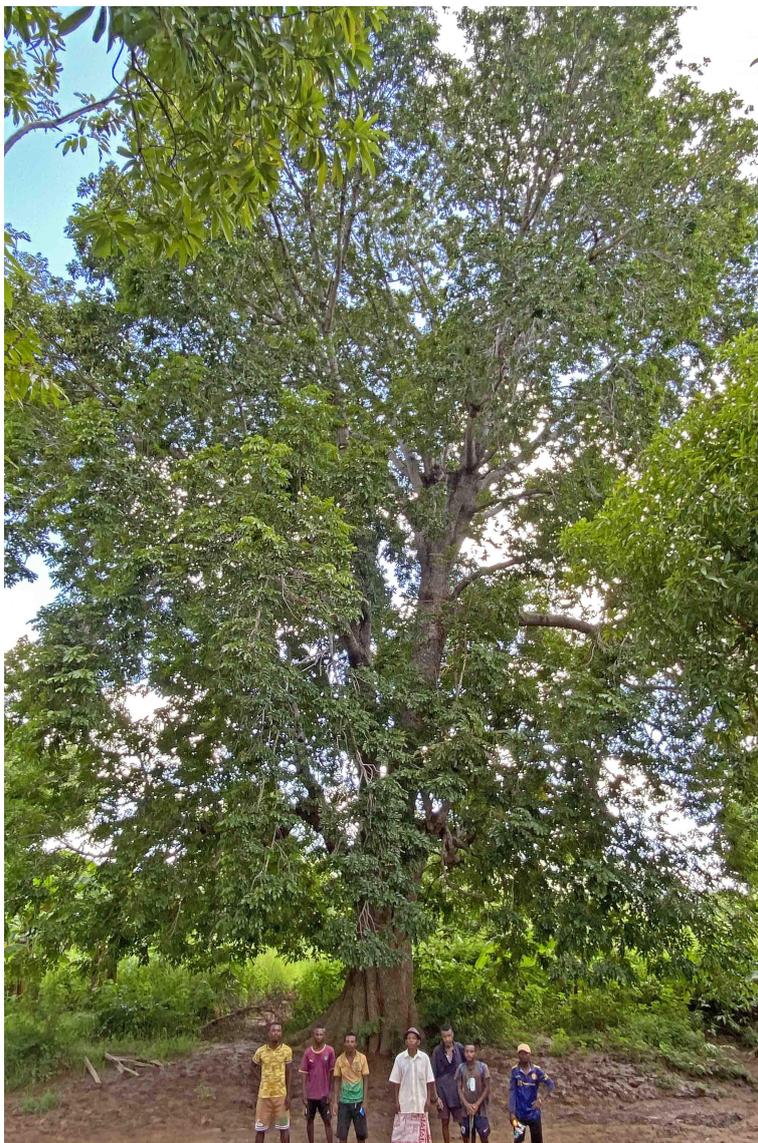
彼らはラミーの苗畑を作ることを快諾しただけでなく、たちまち国際的ラミー植林プロジェクトチーム“International Ramy Plantation Projects : IRPP”を立ち上げました。このメンバーはティアナ教授(写真中央 Prof. Tit. RANARIJAONA Hery Lisy Tiana)を中心に植物園スタッフとブランシャル学長(Prof. Président RANDRIANAMBININA Blanchard)、そしてもちろんヴーラ学長秘書(Madame RAKOTOARISOA Volatiana)とアイアイ・ファンドのアジャさんも入っています。

マジュンガ大学は学生総数 14,000 人(理学部 2,205 人)という大きな大学です。アンジアマングラーナはマジュンガ州の村であり、アジャさんのご両親はマジュンガに住んで苗畑を管理してくれるので、ラミープロジェクトはマジュンガ州に強力な拠点を得ました。

大学側の要望は苗畑を維持するためにも、井戸を掘って水の供給を確保したいということでした。もちろん、井戸掘りは自前でやるということですが、ポンプが……。

私たち国際 NGO の仕事はまだまだあるようです。

2025年2月の最大の発見について報告します。



クラニさん苗畑近く
高さ20メートル、
直径1.8メートル、
樹齢100年（推定）の
ラミーの大木です。

この木には5,000個を超える
果実が実っていました
（2025年2月11日）。

クラニさんの苗畑のオス
のラミーの花粉によってこ
の巨木に春が来たのです。

ラミーは雌雄異株です
から、オスの花がなければ結
実しないので、目立たないメ
スの花だけでは、川沿いのマ
ンゴーの木とされていたの
でしょう。

この木の大きさを実感す
るために、クラニさんの長男
マルセルさんに連絡して、写
真を撮って送ってもらいま
した。根元で手をつないで、
木に登って。（2月17日）

「いや、そうじゃなくて、
それじゃあ逆光
だよ。マダガスカル語でなんて言
えばいいんだ」

首都から600キ
ロメートル離れた現地との間で、
交わされた珍妙
な連絡の末の写



真がこれです。「あ、今日の日当も電話で送って」とかね。



アイアイの主食はラミーの果実、それも種子の中の子葉（cotyledon：胚と胚乳）です。1984年12月に島と「わくわく動物ランド」の撮影チームは世界で初めて野生のアイアイの撮影に成功しました。アイアイが3時間もの間連続して食べていたのは、ラミーの種子でした（左）。



1998年12月に見たラミーの種子の発芽も衝撃でした。子葉が最初に出て、次に双葉が展開するのです（左下：2025年1月23日）。チンバザザ公園でアイアイを育て、生まれた子を日本の動物園に送り、そこから世界にアイアイが広がりました。しかし、マダガスカルにラミ

ーの木がなければ、野生のアイアイは生きていけません。

「ラミー母樹基地プロジェクト」(Ramy Renin 母の Kazo 木 Project)

ラミーの木を種子から育て、それが成熟して果実を作り、そこから新しい苗が生まれるまで27年の歳月がかかりました。これからはこのラミーの母となる木を守り、その子たちをアイアイを育むマダガスカルの森の回復のために全国に送り届けていきます。

首都ではチンバザザ公園とスアピナとアンブヒジャヌ村に、マジュンガ州ではアンジアマングラーナ村とマジュンガ大学に母となるラミーの木を育て守り、その子どもたちを全国に送るための基地を作ります。2025年中にアンジアマングラーナ村で10,000個、アンタナナリヴで5,000個のラミー種子を収集して、雨季始めに苗畑を作り、2026年2月のナショナル・プランテーション・デーに参加します。集まった子どもたちにアメが配られて、それがマダガスカルのお祭りになるといいのですが。

夢の実現に近づいた実感があります。今少しご協力をお願いいたします。

**日本アイアイ・ファン活動報告会は2025年3月22日（土曜日）午後2時から
東京大学総合研究博物館7階会議室です。**

日本アイアイ・ファン代表 島 泰三

〒113・0033 東京都文京区本郷5-3-12 電話 03-3813-6578

「ラミー母樹基地プロジェクト」 (Ramy Renin Kazo Project) 事業対象地域図



The distribution of Aye-aye (*Daubentonia madagascariensis*) and the location of Mother Tree Bases of Ramy Renin Kazo Project (red circle)
(Mananjary Base is proposed by Mr. Bruno.)

We collected the aye-ayes from Anjiamangirana and constructed the house and land for the captive breeding of the aye-aye

The aye-ayes kept at PBZT (1988-1999)

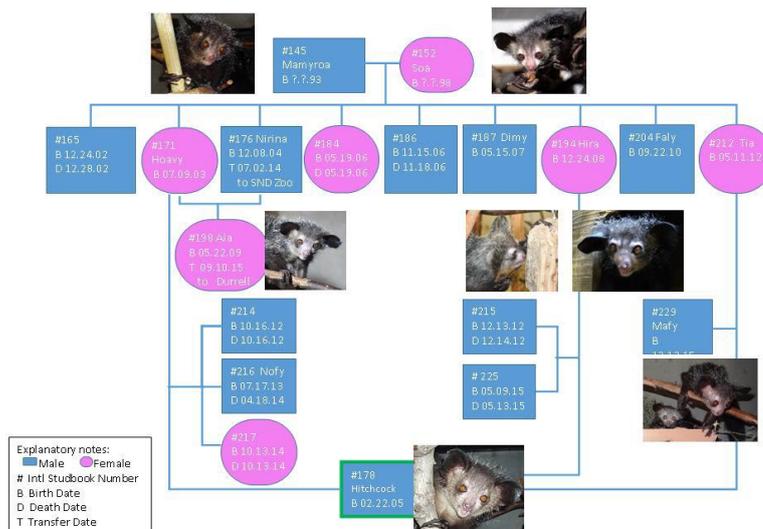
Name	sex	Start year	to raise
Manjia	♀	1988	Baby ♀ born in December 1998 (Died December 25)
Lili	♀	1992	Baby ♂ (Antenna) born in February 1999
Rajao	♂	1993	
Sandy	♂	1993	

Nirina ♀

1998

Tantely	♀	1998	
Mamiroa	♂	1998	Sent to Ueno Zoo in 2001
Soa	♀	1999	Sent to Ueno Zoo in 2001

Pedigree chart of Aye-aye in Ueno zoo



At the Ueno Zoo, the aye-ayes are reproduced successively, they were sent to Sandiego Zoo and Darrow Wildlife Conservation Fund.